

中学校国語科教科書の漢語名詞語彙の実態とその指導 ——説明文教材における場合を中心に——

山 本 建 雄

(平成7年10月31日受理)

Method of Teaching Chinese Word

Takeo YAMAMOTO

(Received October 31, 1995)

はじめに

本研究は、中学校国語科での語彙指導の対象として、名詞語彙の一部であるばかりでなく、語彙全体の中で中心的な位置を占めると見られる漢語名詞語彙の、国語科教科書での使用の実態を明らかにするとともに、その実態をふまえた、望ましい語彙指導のあり方を追求することを目的とした。なお、今回は、対象とする「漢語名詞」を、それぞれの語を構成する文字の全てが音読みされるものに、やや狭く限った。

語彙の実態を明らかにする為に実施した調査では、光村図書、学校図書、東京書籍、教育出版、三省堂出版の、平成6年度版の1～3年までの国語科教科書に所収されている説明文教材（説明文的な性格の随想の類も含む）、全75教材中の、全ての見出し語を対象とした。

Ⅰ 漢語名詞語彙の実態

1 語を構成する文字数の別を基に

(1) 全体

ア 文字数の別

75教材で使用されていた漢語名詞の合計は、2748語であった。これらの語を、語を構成する文字の数の別と、阪本一郎氏の『新教育基本語彙』の学習段階の別と、国研の『分類語彙表』での所収の有無の別とで整理した結果が資料1である。

<資料1>

学習段階 語構成	A	B	C	「教語」収外		合 計
				「分語」収	「分語」収外	
1 字 の 語	43	31	16	7	1	98 (3)
2 字 の 語	236	725	610	333	178	2082 (76)
3 字 の 語	14	20	13	51	335	433 (16)
4 字 の 語	0	0	3	9	105	117 (14)
5 字 の 語	0	0	0	0	16	16
6 字 の 語	0	0	0	0	2	2
合 計	293 (11)	776 (28)	642 (23)	400 (15)	637 (23)	2748 (100)

() は%

今回の調査では、6字の語までの存在を認めた。2字の語が最も多く、2082語あり、全体に占める割合は4分の3にも達している。3字以上の語は、合わせて568語で、全体の5分の1ほどであった。

1字の語の4分の3、2字の語の半数近くは、AないしB段階の語（小学校低学年ないし高学年で学習すべき語）である。次に、中学校での指導の中心対象となるC段階の語（中学校で学習すべき語）と、『新教育基本語彙』にはなくて『分類語彙表』のみにある語（以下D段階の語と呼ぶ）についてみると、1字の語の4分の1と、2字の語の半数近くをこれらの語が占めており、合わせて1000語近くあることが判った。3字以上の語は、A～D段階の語を合わせても107語で、8割以上は『新教育基本語彙』にも『分類語彙表』にも採録されていないもの（以下E段階の語と呼ぶ）である。

イ 使用教材数の別

<資料2>

学習段階 教材数	A	B	C	「教語」収外		合 計
				「分語」収	「分語」収外	
1	124	372	462	280	551	1789 (65)
2	53	165	80	54	54	406 (15)
3～6	72	166	85	54	29	406 (15)
7～14	29	61	15	10	3	118 (4)
15～35	15	12	0	2	0	29 (1)
合 計	293	776	642	400	637	2748 (100)

() は%

資料 2 は、2748語を、使用教材数の別で 5 段階に分けたものである。教材数は、1～35 教材に渡っている。1 教材だけの使用というものが、全体の 6 割を占め、これに 2 教材の語を加えると、全体の 8 割となる。一方、75教材のおよそ 1 割に当る 7 教材から 5 割に当る 35教材までの語は、全体の僅か 20分の 1 ほどの 147語であった。147語のうちの 8 割（117語）は、A ないし B 段階の語である。C ないし D 段階の語（合せて 1042語）の 9 割近く（876語）は、1 ないし 2 教材でしか使用されていないことが判る。

ウ 教科書の別

<資料 3>

学習段階 教科書	A	B	C	「教 語」収 外		合 計
				「分語」収	「分語」収外	
K 社	137 (111)	332 (113)	232 (128)	167 (138)	205 (142)	1073 (124)
S 社	132 (107)	352 (119)	215 (119)	122 (101)	168 (117)	989 (114)
G 社	133 (108)	294 (100)	171 (95)	108 (89)	145 (101)	851 (98)
T 社	112 (91)	266 (90)	161 (89)	109 (90)	109 (76)	757 (88)
M 社	104 (79)	234 (79)	126 (70)	99 (81)	93 (65)	656 (76)
5 社平均	123 (100)	295 (100)	181 (100)	121 (100)	144 (100)	864 (100)

() は 5 社平均を 100 とした時の各教科書の割合

資料 3 は、各教科書で使用されていた語を、学習段階の別で整理したものである。5 社の平均は 864語（2748語の約 3 割）で、最大と最小とでは、417語の違いがあった。学習段階の別を基にみると、教科書間の多少は、主に B、C 段階と E 段階の語の多少に原因していることが判る。

エ 教科書数の別

<資料 4>

教材数 教科書数	1	2	3～6	7～14	15～35	合 計
1	1789	75	11	0	0	1875 (68)
2		331	121	1	0	453 (17)
3			199	18	0	217 (8)
4			62	47	2	111 (4)
5			13	52	27	92 (3)
合 計	1789	406	406	118	29	2748 (100)

() は%

資料4は、2748語を、使用されていた教科書の数（但、各社ともに1～3年を1まとめとする）の別と、使用教材数の別とによって整理したものである。1社（1種類）のみというものが、全体の7割近く（1875語）を占め、これに2社のものを加えると、8割を超える（2328語）。一方、4ないし5社で使用されていたものは、合わせても203語で、全体の1割にも達していない。これら203語のうち、7教材以上で使用されていた語が、6割（128語）を占めていることも判った。

(2) 1字の語

ア 使用教材数の別

<資料5>

学習段階 教材数	A	B	C	「教語」収外		合 計
				「分語」収	「分語」収外	
1	23	15	12	3	1	54 (55)
2	6	5	2	4	0	17 (17)
3～6	10	4	1	0	0	15 (15)
7～14	3	6	1	0	0	10 (10)
15～21	1	1	0	0	0	2 (2)
合 計	43 (44)	31 (32)	16 (16)	7 (7)	1 (1)	98 (100)

() は%

資料5は、1字の語98語を、使用教材数の別と、学習段階の別とで分けたものである。資料2における全体の平均と比べると、教材数1の割合が、65%から55%へと減少する一方で、教材数7～14の占める割合が4%から10%へと増大していることが判る。次に、学習段階の別でみると、AないしB段階の語が、全体の4分の3であり、逆にE段階は僅か1語となっている。

イ 使用教科書数の別

<資料6>

教材数 教科書数	1	2	3～6	7～14	15～21	合 計
1	54	3	0	0	0	57 (58)
2		14	2	0	0	16 (16)
3			11	1	0	12 (12)
4			2	3	0	5 (5)
5				6	2	8 (8)
合 計	54	17	15	10	2	98 (100)

() は%

資料6は、98語を、使用されていた教科書の数の別で分けたものである。3～5社で使われていたものは、合わせて25語で、全体に占める割合は4分の1と、全2748語におけるそれ（6分の1）と比べ、大きな値となっていることが判る。

(3) 2字の語

ア 使用教材数の別

<資料7>

学習段階 教材数	A	B	C	「教語」収外		合 計
				「分語」収	「分語」収外	
1	91	342	437	225	157	1252 (60)
2	45	158	77	47	17	344 (17)
3～6	60	159	82	49	3	353 (17)
7～14	26	55	14	10	1	106 (5)
15～35	14	11	0	2	0	27 (1)
合 計	236 (11)	725 (35)	610 (29)	333 (16)	178 (9)	2082 (100)

() は%

資料7は、2字の語2082語を、使用教材数の別と学習段階の別とで整理したものである。使用教材数については、各段階の語が全体に占める割合は、資料2と比べても大差ない。

次に学習段階の別で見ると、AないしB段階の語を合わせたものと、CないしD段階の語を合わせたものとは、各々全体の45%を占め、資料2における場合をそれぞれ6～7%ずつ上廻っている。これは、B段階とC段階の語の割合がふえているからである。逆にE段階の語は、23%から9%へと、大幅に減少している。

イ 使用教科書の別

<資料8>

学習段階 教科書	A	B	C	「教語」収外		合 計
				「分語」収	「分語」収外	
K社	115 (110)	310 (112)	218 (126)	148 (142)	56 (147)	847 (122)
S社	113 (109)	334 (121)	213 (123)	102 (98)	46 (121)	808 (116)
G社	113 (109)	271 (98)	162 (94)	95 (91)	46 (121)	687 (99)
T社	97 (93)	254 (92)	154 (89)	88 (85)	24 (63)	617 (89)
M社	83 (80)	212 (77)	119 (69)	88 (85)	20 (53)	522 (75)
5社平均	104 (100)	276 (100)	173 (100)	104 (100)	38 (100)	695 (100)

() は5社平均を100とした時の各教科書の割合

資料8は、2字の語を、各教科書ごとに学習段階の別で分けたものである。5社の使用語数の平均は695語で、最大と最小とでは325語の違いがあり、先の資料3のK社とM社の違い(417語)は、主に2字の語の数の違いによることが判った。各社の多少は、学習段階のBとCとの語の多少と深く関り、資料3とは異り、E段階の語との関りは薄い。

ウ 使用教科書数の別

<資料9>

教材数 教科書数	1	2	3～6	7～14	15～35	合 計
1	1252	62	10	0	0	1324 (63)
2		282	104	1	0	387 (19)
3			170	17	0	187 (9)
4			58	42	2	104 (5)
5			11	46	25	82 (4)
合 計	1252	344	353	106	27	2082 (100)

() は%

資料9は、2字の語を、使用教科書数の別で分けたものである。資料4と比べ、1社のみの語が占める割合が、68%から63%へと減少している他は、あまり違いはない。3社以上で使われていた語の合計は373語であった。

(4) 3字の語

ア 使用教科数の別

<資料10>

学習段階 教材数	A	B	C	「教語」収外		合 計
				「分語」収	「分語」収外	
1	10	15	10	43	289	367 (85)
2	2	2	1	3	26	34 (8)
3～6	2	3	2	5	19	31 (7)
7～9	0	0	0	0	1	1
合 計	14 (3)	20 (5)	13 (3)	51 (12)	335 (82)	433 (100)

() は%

資料10は、3字の語433語を、使用教材数の別と、学習段階の別とで整理したものである。資料2と比べると、教材数1の語の占める割合が85%と、目立って多いことが判る。なお、7教材以上の語は「可能性」ただ1語である。

学習段階の別で見ると、E段階の語が全体の8割を占めており、AとBの段階の語を合わせたものも、CとDの段階の語を合わせたものも、いずれも1割前後にとどまる。

イ 語構成の別（『三省堂国語辞典第四版』による）

<資料11>

学習段階 語 構 成	A	B	C	「教語」収外		合 計
				「分語」収	「分語」収外	
1字の語＋2字の語					1	1
2字の語＋1字の語	1	2	3	8	77	91 (21)
造語成分＋2字の語		7		9	29	45 (10)
2字の語＋造語成分	11	9	7	25	206	258 (60)
接頭語＋2字の語	1	1	2	4	6	14 (3)
2字の語＋接尾語	1			2	16	19 (4)
1字の語＋1字の語＋1字の語			1	1		2
省 略		1		2		3 (1)
合 計	14	20	13	51	335	433 (100)

() は%

資料11は、3字の語を、語構成の別で整理したものである。大きくは、2字の語と1字の語ないし語構成要素とからなるもの、対等の関係にある3つの語からなるもの、省略（例－「動物」と「植物」とからなる「動植物」）の3つの型に分けられる。但、第2と第3の型のものは、合わせても5語である。第1の型のものは、1字の部分が、語か語構成要素か、前接か後接かで、更に6つの型に分けられる。なお、資料11の分類は『三省堂国語辞典第四版』のそれによった。「2字の語＋1字の造語成分」の型のものが最も多く、258語と全体の6割を占め、「2字の語＋1字の語」の型のものが、91語でこれに続く。

ウ 構成要素の別

<資料12>

語 数 構成要素	1	2	3	6～9	10～25	合 計
前接の造語成分	23	5	3	0	0	31 (24)
後接の造語成分	43	21	14	5 ⁽¹⁾	6 ⁽²⁾	89 (68)
接 頭 語	4	0	0	2 ⁽³⁾	0	6 (5)
接 尾 語	2	0	1	0	1 ⁽⁴⁾	4 (3)
合 計	72 (55)	26 (20)	18 (14)	7 (5)	7 (5)	130 (100)

(1) 形, 所, 品, 部, 家 (2) 物, 語, 人, 力, 者, 性 (3) 不, 無 (4) 化

() は%

資料12は、130種類の語構成要素を「前接の造語成分」以下の4つの項目に分け、更に個々の要素が、いく種類の語の構成要素となりえているかで整理したものである。「後接の造語成分」に当たるものが89種類と、全体の7割近くを占めていることが判る。130種類の4分の3までは、1ないし2種類の語の構成に関係しているだけである。

エ 語基の別

<資料13>

学習段階 語	A	B	C	「教語」収外		合 計
				「分語」収	「分語」収外	
1 字の語	15	16	3	5	1	40
2 字の語	40	120	96	57	56	369
合 計	55 (13)	136 (33)	99 (24)	62 (15)	57 (14)	409 (100)

() は%

資料13は、3字の語の語基となっている409種類の1ないし2字の語を、学習段階の別で整理したものである。各段階の語の全体に占める割合は、E段階の語が9%から15%へと増加している他は、1ないし2字の語が単独で存在する場合とあまり変りがない。

(5) 4 字の語

<資料14>

学習段階 教材数	C	「教語」収外		合 計
		「分語」収	「分語」収外	
1	3 ⁽¹⁾	9	88	100 (85)
2	0	0	10	10 (9)
3～6	0	0	6 ⁽²⁾	6 (5)
7～14	0	0	1 ⁽³⁾	1 (1)
合 計	3 (2)	9 (8)	105 (90)	117 (100)

(1) 異口同音, 一部始終, 多種多様 (2) 化石燃料, 環境汚染, 自然現象,
自分自身, 生物学者, 人間関係 (3) 日常生活 () は%

資料14は、4字の語を、使用教材数の別と学習段階の別とで整理したものである。使用教材数に関する各段階ごとの、全体に占める割合は、資料10の3字の語の場合と似通っている。学習段階の別においては、3字の場合と異なり、AないしB段階の語はなく、E段階の割合は更に増加し、9

割にも達している。

イ 語構成の別

資料15は、4字の語を、語構成の型の違いで分けたものである。大きくは、2字の語2組みからなるもの、3字の語と1字の語ないし語構成要素（造語成分）とからなるもの、対等の関係にある4つの語からなるもの、省略の4つの型に分けられる。第2の型のものについては、3字の部分の語構成によって、更に細分化できる。第1の型に属するものが、101語と、他の全ての型に抜きんで多く、全体の9割近くを占めていることが判る。

<資料15>

学習段階 語 構 成	C	「教語」収外		合 計
		「分語」収	「分語」収外	
2 字の語 + 2 字の語	3	9	89	101 (86)
3 字の語 + 1 字の語	0	0	1	1 (1)
3 字の語 + 造語成分	0	0	13	13 (11)
1 字の語 + 1 字の語 + 1 字の語 + 1 字の語	0	0	1	1 (1)
省 略	0	0	1	1 (1)
合 計	3	9	105	117 (100)

() は%

2 意味分類を基に（国研『分類語彙表』による）

(1) 中分類項目（小数点以下第 1 位の項目）

<資料16>

分 類 項 目		小分類項目数 = A	語数 = B	$\frac{B}{A}$
1 体 の 類	1.1 抽象的關係	138 (29)	888 (34)	6.4
	1.2 人間活動の主体	55 (12)	348 (13)	6.3
	1.3 人間活動－精神および行為	162 (35)	820 (31)	5.1
	1.4 生産物および用具	57 (12)	241 (9)	4.2
	1.5 自然物および自然現象	57 (12)	346 (13)	6.1
	合 計	469 (100)	2643 (100)	5.6
3 相 の 類	3.1 抽象的關係	23	66	2.9
	3.3 精神および行為	16	32	2
	3.5 自然現象	7	7	1
	合 計	46	105	2.3
総 計		504	2748	5.5

() は%

資料16は、中分類項目（小数点以下第 1 位の項目）ごとに、属する小分類項目（小数点以下第 3 位ないし第 4 位の項目）の数と、属する語の数とを記したものである。2748語は、2 類 8 中分類項目 504 小分類項目に分けられる。小分類項目のうちの 9 割以上の 469 項目は「体

の類」に属する。「体の類」では、「1.1 抽象的關係」と「1.3 人間関係－精神および行為」とに關係するものが、それぞれ全体の3割前後を占め、他の3つの中分類項目は、ほぼ同数でこれに続く。各中分類項目に属する語の数の割合は、小分類項目数における場合と似た傾向にある。

(2) 小分類項目（小数点以下第3，4位の項目）

ア 項目ごとの語数の別

<資料17>

小分類項目の語数 分類項目		1	2	3～5	6～9	10～19	20～42	合 計
1 体 の 類	1.1 抽象的關係	19	21	48	29	25	5	138 (29)
	1.2 人間活動の主体	9	8	17	11	8	2	55 (12)
	1.3 人間活動－精神および行為	29	25	54	24	18	2	162 (35)
	1.4 生産物および用具	16	6	20	10	5	0	57 (12)
	1.5 自然物および自然現象	9	6	15	16	9	2	57 (12)
	合 計	82 (17)	57 (12)	154 (33)	89 (19)	65 (14)	11 (3)	469 (100)
3 相 の 類	3.1 抽象的關係	7	3	9	4	0	0	23
	3.3 精神および行為	7	4	5	0	0	0	16
	3.5 自然現象	7	0	0	0	0	0	7
	合 計	21	7	14	4	0	0	46
総 計		103 (20)	64 (13)	168 (33)	93 (18)	65 (13)	11 (2)	504 (100)

() は%

資料17は、8つの中分類項目ごとに、それぞれに属する小分類項目に、いくつの語が存在するかで分けたものである。「体の類」のいずれの中分類項目においても、「3～5語」の語からなる小分類項目が最も多く、「1.5 自然物および自然現象」を除き、いずれも全体の3割前後を占めている。「1語」と「2語」の項目とを合わせたものと、「6～9語」と「10～19語」の項目を合わせたものだが、それぞれ全体の3割前後となっている。これら三者で、全体をほぼ3等分するかたちとなっていることが判る。

イ 分類された語の多い項目

資料18は、504の小分類項目のうちで、所属する語が多かった22項目を、それぞれの項目に關係する語を添え、一覧のかたちにしたものである。これらの小分類項目のうち、10項目までは、中分類項目「1.1 抽象的關係」に属するものである。10語以上からなる小分類項目は全部で76項目（全体の6分の1）あり、これらの項目に關係する語の合計は1134語で、全体の4割を占めている。

<資料18>

分 類 項 目	語 例	語数
1.1130 性質	〈A〉性質〈B〉習性, 性格〈C〉本質, 個性, 特性 〈外〉独自性, 創造性	42
1.2410 専門的技術的職業	〈A〉医者, 学者〈B〉教授, 作家〈外〉科学者, 詩人, 研究者, 彫刻家	42
1.234 人物	〈B〉英雄, 天才, 旅客〈C〉常連, 達人, 凡人 〈外〉名人, 知識人, 発見者	40
1.3001 感覚	〈A〉感心〈B〉印象, 感覚, 感動〈C〉感慨, 衝動 〈外〉感性, 疎外感	35
1.524 地形, 山野	〈A〉平野〈B〉大地, 大陸, 地形〈C〉山岳〈外〉 山野, 盆地, 沖積地	24
1.1720 範囲, 席, 跡	〈A〉座席〈B〉境界, 範囲〈C〉視野, 分野, 領域 〈外〉足跡, 対流圏	23
1.1750 面, 側, 表, 裏	〈A〉地面〈B〉画面, 内面〈C〉側面, 反面〈外〉 地表, 海面, 壁面, 路面	21
1.5111 鉱物	〈A〉石炭, 宝石〈B〉化石, 水晶〈C〉灯油〈外〉 土壌, 土砂, 下層土, 表土	21
1.1731 方面, 方角	〈A〉四方, 方角〈B〉方面〈外〉西部, 東西, 東方, 最北	20
1.193 角度, 軽重, 寒暖	〈B〉角度, 体重, 水温〈C〉水压〈外〉鮮度, 濃度, 低緯度, 適温	20
1.330 文化, 歴史, 風俗	〈B〉風俗, 文化, 文明〈C〉習慣, 伝統, 文物 〈外〉異文化, 言語文化	20
1.192 長短, 広狭	〈B〉距離, 直径, 面積〈C〉規模, 容量, 大小, 至近距離, 体長	19
1.253 国	〈A〉外国〈B〉国際, 国家〈外〉諸国, 大国, 本土, 先進国, 隣邦	19
1.3080 原理, 規則, 主義	〈A〉規則〈B〉規定, 原則, 法則, 主張〈C〉原理 〈外〉民主主義	18
1.1980 一般, 全体, 部分	〈A〉全部〈B〉一切, 一般, 大半〈C〉総体〈外〉 全国, 全員	17
1.5110 化学成分	〈A〉金, 鉄〈B〉金属, 酸素, 水素, 硫酸, 青銅, 二酸化炭素	17
1.1100 類, 例	〈A〉種類〈B〉形式, 实例〈C〉様式, 象徴〈外〉 好例, 品種, 新種	16
1.170 空間, 場所	〈B〉各地〈C〉空間, 現地〈外〉立地, 住宅団地, 生息地, 予定地	16
1.3065 研究, 実験, 調査, 検査など	〈A〉観察〈B〉研究, 実験, 調査, 発明〈C〉追求 〈外〉探查, 模索	16
1.1400 力	〈B〉強力, 全力〈C〉自力〈外〉創造力, 入力, 表現力	15
1.470 地類 (土地利用)	〈A〉公園〈B〉耕地, 水田, 農地, 〈C〉用地 〈外〉球場, 国立公園	15
1.526 海, 島	〈A〉海岸〈B〉沿岸, 海峡, 半島〈C〉孤島〈外〉 深海, 内海	15

< >は学習段階 <外>はD, E段階

II 漢語名詞語彙の指導

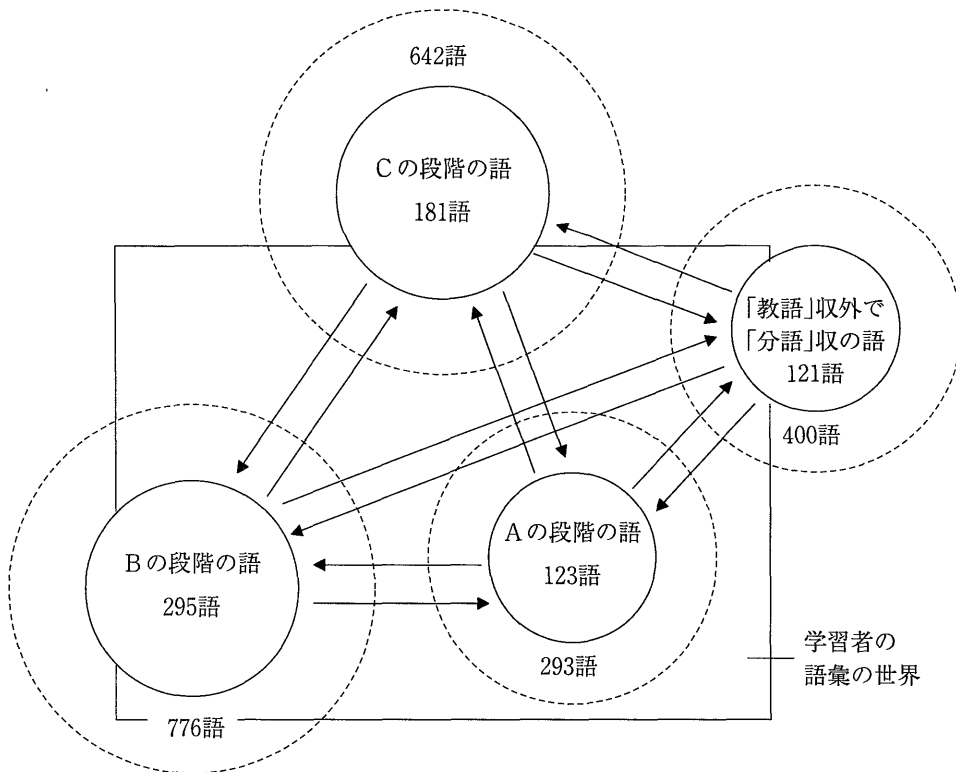
1 学習段階の別を基に（阪本一郎『新教育基本語彙』による）

先に、漢語名詞語彙の実態を、阪本氏の『新教育基本語彙』のA～Cの学習段階の別に、D、Eの段階を加え、把握しようとした。A～Dの各段階の語の持つ意味の違いを基に、中学校における漢語名詞語彙指導について考えてみた。

資料19は、指導開始時点での、学習者の語彙の世界とA～D段階の語（今回調査した説明文教材所収の）との関係を図示したものである。実線は、各教科書を通して学べる語彙（但、5社の平均）を、破線は、5社の75教材によって学ぶことのできる語彙を示す。

中学における主たる指導内容は、次のようなものとなる。Bの段階の語については、語彙の世界の外にある実線内の語、破線内の語を、理解語彙として、なるべくなら余すところなく内側に取り込むこと。さらに理解語彙から、表現語彙へと引き上げること。C段階とD段階の語については、語彙の世界の外にある実線内の語を、理解語彙として内へと取り込むこと。破線内の語についても、機会を拘え、時間の許す範囲で、同じ扱いをするよう努めること。更に、語彙の世界の内にある語（新たに追加された語も含む）の一部を、表現語彙へと移行させることが、これに加わる。

<資料19>



2 共通語彙と準共通語彙

使用教科書数に加え、使用教材数が多かった語、言い換えると、多くの学習者が共通に、また繰り返し学ぶ語を、2748語の中から共通語として抜き出した。更にこれに準ずるものを、準共通語とした。資料20の太い線で囲まれた221語が共通語彙であり、3教科書の3～6教材で使用されていた199語が準共通語彙である。

<資料20>

教材数 教科書数	3～6	7～14	15～35
3	199語	<A> 学校, 空気, 季節, 文学 会話, 時期, 習慣, 前後, 態度, 知識, 文明 <C> 実, 現実, 事態, 状況, 野生, <外> 第二, 民族	0語
4	<A> 字, 家族, 危険, 気分, 質問, 地面, 自由, 準備, 少年, 石炭, 道具, 途中 際, 科学, 過去, 家庭, 機会, 記憶, 基本, 金属, 結論, 原因, 光景, 構造, 最大, 作品, 証拠, 常識, 女性, 人口, 水田, 精神, 生長, 責任, 石油, 組織, 大気, 大量, 者陰, 農業, 発見, 例外 <C> 意識, 個体, 実感, 周辺, 水準, 大古, 対象, 本質, 物質, 本来, 唯一, 容器, 情報 <外> 古代, 樹木, 地表, 同様, 両者, 外国人, 共通点	<A> 用, 一面, 学者, 実際, 写真, 種類, 新聞, 性質, 知恵, 土地, 普通 差, 他, 以来, 印象, 温度, 活動, 基礎, 経済, 行動, 作業, 事実, 人類, 性格, 大陸, 草原, 他人, 調査, 程度, 同時, 内容, 秘密, 表現, 面積, 一般 <C> 概念, 過程, 関心, 興味, 地域, 地帯 <外> 自信, 第一, 毎年, 友人, 可能性, 日常生活	<A> 動物 現在
5	<A> 全部 価値, 気温, 共通, 酸素, 実験, 生命, 話題 <C> 未知, 創造 <外> 今後, 自分自身, 二酸化炭素	<A> 気, 点, 面, 一方, 英語, 外国, 気候, 今度, 最後, 最初, 中心, 反対, 様子, 今日 逆, 種, 量, 以外, 位置, 影響, 宇宙, 各地, 感情, 技術, 距離, 結果, 研究, 現代, 事情, 周囲, 条件, 想像, 地方, 当時, 特徴, 都市, 努力, 能力, 風景, 変化, 方向, 目的 <C> 環境, 機能, 存在, <外> 一部, 自身, 自体, 表面	<A> 別, 意味, 以上, 時間, 自然, 自分, 社会, 植物, 生活, 世界, 全体, 人間, 方法, 問題 例, 以前, 関係, 経験, 時代, 状態, 生物, 必要, 部分, 文化, 歴史 <外> 最近, 毎日

< > は学習段階 <外> はD, E段階

これらの語は、使用する教科書における所収の有無を問わず、とりたてるなり、他の語と関係づけるなりして、丁寧に指導したいものである。また、理解語彙から表現語彙へと移行を進める際も、これらの語を優先するとよい。

3 「壺」（東京書籍「新しい国語3」所収）の場合

(1) 要旨との関りの別

説明文教材の語彙は、読解指導の導入、展開、整理の各段階に分け、互いに関連づけて指導される。展開の段階での指導が中心となり、要旨との関りの深い語が取り上げられる。

資料21は、東京書籍「新しい国語3」所収の「壺」で使用されていた87語の漢語名詞語彙を、要旨との関りの深さの別と、学習段階の別とで整理したものである。関りの深い32語は、展開の段階で、内容理解の為に上げられ、これらの語の理解が、教材文の内容理解の深さ、確かさと直結する。この教材文の場合、要旨との関りの深い語のうちで、C段階の語が21語と、全体の7割近くを占めると、E段階の語が4語加わっていることが注目される。関りの浅い語のうち、C段階の語とD段階の語、特別に指導の必要を認めたB段階の語については、導入ないし整理の段階で、とりまとめて指導するのがよい。

<資料21>

学習 段階 要旨との 関り	A	B	C	「教後」所収		語 数
				「分語」収	「分語」収外	
深 い	用	常識，進歩， 装飾	◎意識◎機能，器物，器 量◎空間，形態，資質， 事象◎実，充実，相対◎ 存在◎対象，墮落，度 量，美点，評価◎本質， 無，容量，余地	指 向， 本 体， 有	恐怖症，対 立概念，非 存在，有用 性	32
浅 い	一方，気，景 色，公園，今 度，時間，実 際，小学生， 自由，知恵， 粘土，噴水， 方法	希望，根源， 作品，施設， 時間，瞬間， 性格，設備， 尊敬，大半， 同一，当然， 部下，部分， 勇，理想	花壇，機知○思考，視 線，進言，陶工，覇業○ 本来，名手	各 種， 工 芸， 語句， ○個人，古 人◎古代， 策，中世， 兵法，◎両 者	原始時代， 古陶磁，思 想家，爽快 感，陶芸， 必然性，文 様	55

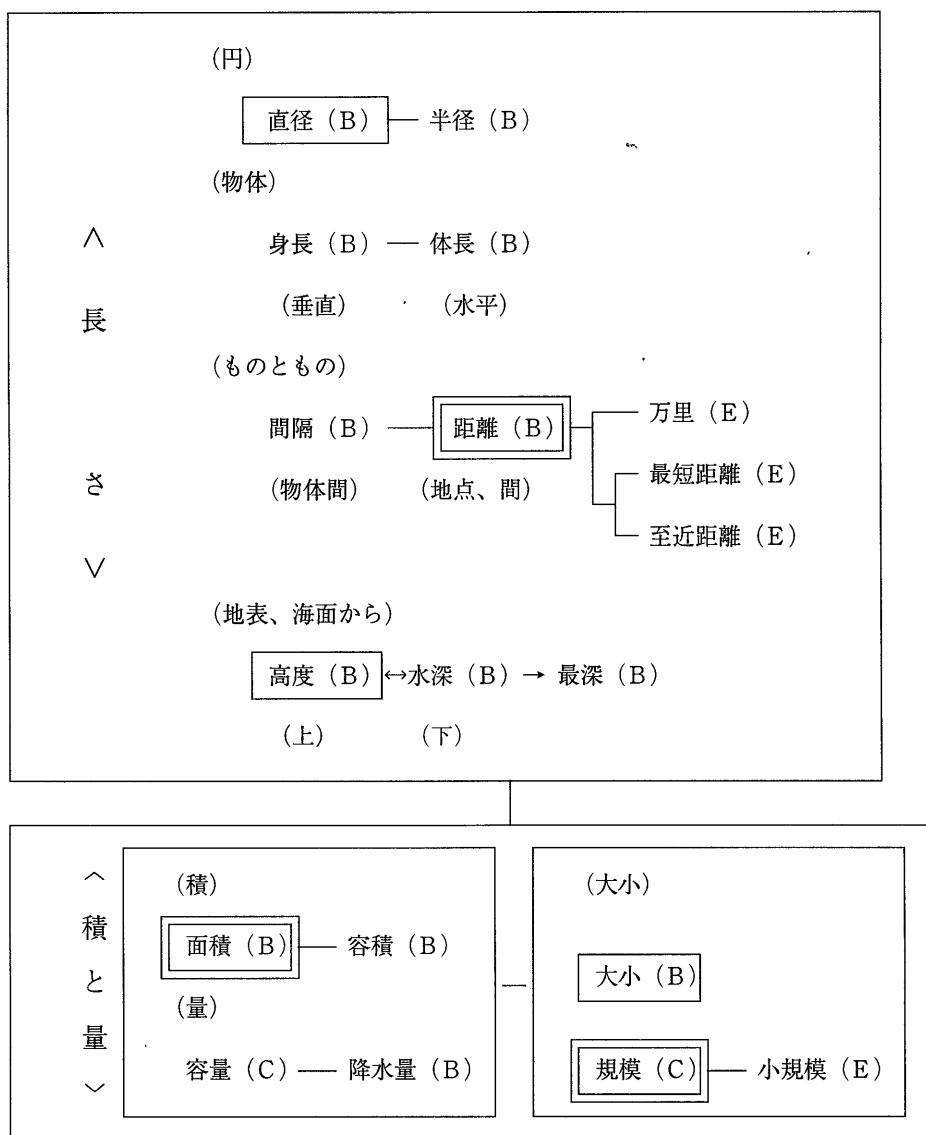
◎共通語彙 ○準共通語彙

(2) 個別の語（容量）の扱い—語彙構造をふまえて

個別の語の指導は、小分類項目を同じくする他の語とからなる語彙の構造をふまえ行われなくてはならない。語彙を構成する語は、実際に教材文で使われていたものを中心に、適宜「分類語彙表」から補うとよい。

「壺」所収の語「容量」は、小分類項目「1.192 長短広狭」に属し、今回の調査では仲間の語が18語あることが確かめられている。資料22は、これら19語からなる語の集団の構造を図示したものである。指導をどの範囲にまで拡げるかは、語「容量」について、どのような内容を、どのような方法で学ばせるかによって変る。少なくとも、語「容積」との異同については取り上げられなくてはならない。また、同じ教材文中の、小分類項目が異なる「器量、度量」との異同の確認も課題となる。

<資料22>



() は学習段階 ☒ 共通語彙 ☐ 準共通語彙